

2023年3月5日（日）「信仰のマラソン ～スミルナ信徒の忍耐～」

ヨハネの黙示録 2:8-11

8 スミルナにある教会の天使に、こう書き送れ。『最初の者であり、最後の者である方、ひとたび死んだが生き返った方が、こう言われる。9 「私は、あなたの苦難と貧しさを知っている。しかし、本当はあなたは豊かなのだ。また、自分はユダヤ人であると言う者たちがあなたを非難していることも知っている。しかし、彼らはユダヤ人ではなく、サタンの集会に属しているのだ。10 あなたは、受けようとしている苦難を決して恐れてはならない。見よ、悪魔が試すために、あなたがたのうちのある者を牢に投げ込もうとしている。あなたがたは、十日の間、苦しみを受けるであろう。死に至るまで忠実であれ。そうすれば、あなたに命の冠を授けよう。11 耳のある者は、霊が諸教会に告げることを聞くがよい。勝利を得る者は、決して第二の死によって損なわれることはない。』

【序論】

私たちの人生はマラソンに例えられることがあります。私自身はフルマラソンを経験したことがないのですが、運動部だった頃はどちらかと言うと短距離よりも長距離の方が好きでした。しかし、体力に任せて感覚だけで走っていましたので、部内でどうしても敵わない同期がいました。彼はただ持久力があつたわけではなく、走る道の起伏とかペース配分を考えてレースを組み立てていたようです。以前に読んだ産経新聞の記事に、オリンピック選手を指導していた斎藤太郎氏の文章が載っていましたので、引用してみましよう。

「マラソンを快走するということは、自動車に例えるとガソリン満タンでスタートし、上手に燃料を使い切ってフィニッシュするといったものです。配分を間違えて燃料を早く使いすぎ、ガス欠を起こすことがあってはいけません。これは単に時速何キロの一定速度を終始キープする必要があるということではありません。コースはずっと直線、平たんではなく、上り下りあり、カーブあり。向かい風・追い風を受けることもあって、さらに途中の何カ所かで給水もします。こうしたコース上の様々な変化の中で、速度の維持ではなくて、「低燃費」を維持しながらゴールに向けて自分の体を運んでいくことが大事なのです。むやみに速度を保つためにアクセルを踏みすぎるとは、終盤の落ち込みにつながります。上り坂にもかかわらず、かたくなにペース維持にこだわってアクセルを踏むような走り方は禁物です。」

（2014年3月14日の記事）

信仰の道のりも起伏の激しいマラソンのようなものであると私は認識しています。比較的安定した走りができる時期もあれば、蓄えていたエネルギーの多くを費やさなくてはならない時期もある。自分が今人生のどういう道を走っているのかを理解すること、また来るべき患難の時に備えて心の準備をしておくことも大切でしょう。

【本論】

本論 1. スミルナという町について

今日は七つの教会の二つ目、スミルナの教会へのメッセージから学んでまいります。まず「スミルナ」という町について理解しておきましょう。



聖書地図で確認できますように、小アジア地域でエペソの北方 56km に位置する大都市で、現在ではイズミールというトルコ西部の都市に該当します。古来より「エーゲ海の真珠」と呼ばれるほど美しい港を持っている町で、貿易によって栄えました。現代においても、イスタンブールに次ぐトルコ第二の港湾施設を保有しているといわれます。歴史を遡りますと、紀元前 600 年頃リディアによって破壊されましたが、アレクサンドロス大王の時代に新しく都市が建設されました。この町はローマとの親交を熱望し、まだギリシャが隆盛を誇っていた時代に既にローマの神殿を建てていたといえます（紀元前 195 年頃）。戦略的にはかなり先を見通していたと言えるでしょうか。更に紀元 26 年にはローマ皇帝ティベリウスのための神殿を建てることで、ローマへの忠誠を示しました。紀元 66-74 年のユダヤ戦争の頃、パレスチナから多くの貧しいユダヤ人がこの地に移住しましたが、その一部がスミルナの教会を形成していたと思われます。

スミルナの教会にはポリュカルポスという有名な主教がいましたが(69 年頃～155 年頃)彼の殉教の逸話はよく知られています。彼は使徒ヨハネに師事し、ヨハネによってスミルナの主教に任命されたとさえ言われる。更に、エイレナイオスという代表的な教会教父の先生

で、まさしく第2世紀のキリスト教会の重要人物でありました。彼が書き残したと言われる唯一の書簡はピリピ人宛のもので、背教的傾向の増大に対する警告が書かれているようです。彼はローマ帝国への不服従の廉で捕えられましたが、官憲からローマ皇帝への忠誠を誓うことを求められたとき、こう答えたようです。「私は84年間キリストに仕えましたが、ただの一度もキリストが私を悪く取り扱われたことはありません。どうして私が自分を救ってくださった王を冒瀆することができますか」。彼は火刑となり、殉教の死を遂げました。彼の死後、『ポリュカルポスの殉教録』が書かれました。

このような立派な指導者がいた教会に向けて書き送られたメッセージとして、今日の箇所を読んでいくことができます。

本論2. 苦難と貧しさ

スマルナにある教会の天使に、こう書き送れ。『最初の者であり、最後の者である方、ひとたび死んだが生き返った方が、こう言われる。(2:8)

「天使」という語は「ἄγγελος／アγγελロス」でありますから、「使節」「神からのメッセンジャー」と解釈することもできる。それゆえに、神のことばを取り次ぐ立場にあるポリュカルポスを指しているのではないかという説もあります。

「最初の者であり、最後の者である方、ひとたび死んだが生き返った方」、これがイエスの十字架の死と復活を言い表していることは明らかです。迫害下にあったスマルナ教会の人々は、死と背中合わせの恐怖を味わっていたと思われます。それゆえに、主イエスのご自身もひと度死を味わった存在であることを強調し、尚も信仰に立ち続けるよう励ましを与えているのです。

「私は、あなたの苦難と貧しさを知っている。しかし、本当はあなたは豊かなのだ。また、自分はユダヤ人であると言う者たちがあなたを非難していることも知っている。しかし、彼らはユダヤ人ではなく、サタンの集会に属しているのだ。(2:9)

スマルナ教会は極度の貧しさの中にあっただようです。迫害によって財産を没収されたのでしょうか。あるいは地域社会から拒絶された者もあっただのかもしれませんが。村八分というのは怖い制裁です。その村の掟や慣習を破った者に対して、その地域全体が結束して交際を絶つ。すると、その人は食べ物も買うことができなくなる。文字通り、生きていくこと自体が困難になります。その人と会話をするだけで敵視されてしまうため、仲の良かった人にまで距離を置かれてしまう。

少し現代的な問題に照らしてみましよう。既に隣国で実施されているスコアシステムでは、政府にとって危険な行動をする人の社会的なスコアが下がるため、そうすると反政府デモに参加した人などは買い物もできず自宅にも帰れない状況になります。また、社会的スコアの低い人と仲良くすると、その人のスコアも下がってしまうため、友達関係も分断されてしまう。そのような社会が全世界で進みつつあり、超監視管理社会が構築されようとしています。そうすると、村八分の現代版は簡単に起こるようになるでしょう。

スミルナ教会に属する人々を非難しているユダヤ人がいたと書かれています。ローマ帝国にキリスト者の悪い噂を吹聴する人々があったのでしょうか。ありもしない噂が流れるのは大変困ることです。マスコミで一斉に報じられると、国民の多くがその情報を信じてしまいます。偽りの証言をする者は「**サタンの集会に属している**」とまで言われる。彼らは真のユダヤ人ではなく、神に敵対する勢力にほかなりません¹。

本論 3. 何のための忍耐か

あなたは、受けようとしている苦難を決して恐れてはならない。見よ、悪魔が試すために、あなたがたのうちの**ある者を牢に投げ込もうとしている**。あなたがたは、十日の間、苦しみを受けるであろう。死に至るまで忠実であれ。そうすれば、あなたに**命の冠**を授けよう。(2:10)

¹ 我々一般人の目には隠されているが、現在世界を金融によって支配している人々は「フェニキヤ人」、米国の政治を陰で動かしているディープステートは「ハザール人」と呼ばれる。フェニキヤ人は元々ローマの金貸しであったが、ヨーロッパ各国の王族と結びついて巨万の富を築いたと言われている。現在ヨーロッパの富のほとんどを掌握しているのはフェニキヤ人であり(「英守旧派」「Tax Haven」または「黒い貴族」とも言う)、既存の世界の金融システムを作ったのも彼らであるようだ。彼らの視座に立つならば、我々庶民の資産は我々のものではない。一般大衆の上には企業があり、企業に金を貸しているのは銀行であり、銀行の上には中央銀行があり、その頂点に「BIS」と呼ばれる「中央銀行の中の中央銀行(スイス銀行)」が存在する。フェニキヤ人は血筋的にはユダヤ人ではなくタルムード信者なる「偽のユダヤ人」であるが、ユダヤ人のふりをしてハザール人にもカネを貸し、現アメリカ民主党を経済力で動かしている。ハザール人は、自分たちこそ選民であり世界の頂点に立ち神の国を完成させなくてはならないという教育が施され、異民族を「ゴイム」と呼んでいる。彼らは紀元 11 世紀来 1000 年に亘ってスラブ民族との戦い繰り返してきているが、それは彼らにとってスラブ人(slave)は奴隷であり支配下に置かなくてはならない存在だからである。現在のロシアーウクライナ戦争は本質的にその延長線上にある出来事ではない。ハザール人はカネのためなら何でもやる人々であり、ネオコンはディープステートの軍事部隊として永遠に無意味な戦争を世界中に仕掛け続ける。使用期限内に武器を使い切り、新たな戦争によって軍需産業は儲かり、その金は BIS に流れ込むのである。

この、カネに魂を売った人々の出自を辿ると、旧約聖書の初期に信仰の道から逸れて行ったカナン人に行き着くという。カナン人は悪魔崇拝者であり、宗教的オルギア(狂宴)によって殺人を是とし、自らを「カインの末裔」と呼び、歴史を通じて神への反逆を企て続け、自らを神の位置に置こうとしてきた。アメリカの 1 ドル紙幣に描かれている「プロビデンスの目」には複数の意味があるが、「すべてを見通す目」として、本来神にしかできないことを自分たちの手で成し遂げようとしている。それに対し、セムの家系から出た者の中に「真のユダヤ人」がおり、キリストはその系図に属する。カネによる大衆の支配は第一世紀のユダヤのサンヘドリンにも当てはまるのであり、イエスは真っ向から悪魔的な勢力と戦われた。荒野の誘惑においてサタンは「もし、ひれ伏して私を拝むなら、これを全部与えよう」(マタイ 4:9)とイエスに選択を迫っているが、これは「金融によって一緒に世界を支配しないか」という誘いの一面もあるかもしれない。それまでのほとんどの国家的支配者はこの誘惑に屈してきたのであり、リンカーンやフセインのように従来の金融システムを変えようとした人々は闇に葬られてきた。同じ誘惑の言葉は現代に至るまであらゆる為政者に語りかけられ続けている。「**あなたがたは、神と富とに仕えることはできない**」(マタイ 6:24)というイエスのことばは、このような観点から見ても真実なのである。

苦しみのただ中にあるスミルナの信徒たちに向けて、主イエスは「苦難を恐れるな」と激励されます。投獄と死が間近に迫っている人々に対して、「逃げろ」とは言われなかったのです。むしろ、立ち向かうことが勧められる。その苦難の期間は「十日」と言われていますが、これは文字通りの「十日」ということではなく、「限定された期間」を象徴しているでしょう。背景にはダニエル書に出てくる「試みの期間」があると思われます。

「どうか、あなたの僕たちを十日間試してください。私たちに野菜をください、それを私たちは食べます。水をください、それを飲みます。」……世話役はこの言葉を聞き入れて、十日間彼らを試した。(ダニエル 1:12, 14)

ダニエルをはじめとする4人のユダヤ人の若者には、バビロニアの王室に仕えていたとき、その国の食べ物が増給されようとなりました。しかし、彼らは律法に違反することを避け、その食事を断りました。代わりに野菜のみ提供してくれるよう求め、そのような食事でも他の従者たちよりも健康であることを証明しました。この十日は「試みの期間」であり、彼らの命が懸かっていた期間とも言えます。ヨハネはこの出来事になぞらえてスミルナの信徒たちの状況を理解しているのでしょうか。つまり、試みの期間が終了したとき、彼らは必ず勝利を得ることが約束されているのです。たとえ命を失ったとしても、彼らは勝利者なのだ。主イエスは死に至るまで神に忠実であられた。サタンは何をもってしても主イエスの信仰を取り去ることはできなかったのです。それと同じように、スミルナの信徒たちも死に至るまで神に忠実であるとき、勝利の道を全うするということが言われている。これは必ずしも殉教だけのことが言われているのではなく、信仰の道を全うしようとしているすべての信者に向けられている激励です。

「**命の冠**」とは「永遠のいのち」のことであり、パウロが「**義の冠**」(Ⅱテモテ 4:6-8)、「**朽ちない冠**」(Ⅰコリント 9:25)、ペテロが「**しぼむことのない栄光の冠**」(Ⅰペテロ 5:4)と呼んでいるものと同じでしょう。更には、主イエスが受難のときに頭に被せられた「**いばらの冠**」(ヨハネ 19:2)も、苦しみの向こう側にある栄光を表しています。

耳のある者は、霊が諸教会に告げることを聞くがよい。勝利を得る者は、決して第二の死によって損なわれることはない。』(2:11)

死には「第一の死」と「第二の死」があると聖書は語ります。「第一の死」は「肉体の死」、「第二の死」は「霊的な死」、すなわち最後の審判を経て突入する永遠の刑罰。サタンが至るべき「火と硫黄の燃える池」(21:8)です。信仰の道を歩み抜いた者は永遠の神との交わりのうちに入るのであって、「第二の死」とは無縁なのです。罪のうちを生きていたときは縁のあった世界でしたが、今や私たちはキリストにあって「第二の死」の呪いが取り去られています。

【結論】

スミルナ教会の壮絶な状況と、それにまさる主イエスの励ましのことばを見てまいりました。私たちの信仰の歩みがどのように導かれていくかは分かりません。マラソンの道には

勾配もあればカーブもあります。真っ直ぐな道を走っているときは力を蓄えましょう。ひたすら感謝を学ぶ時があるはずです。そして、その感謝は試練の中にあっても現れるようになる。最後にパウロのことばを引用します。

そればかりでなく、苦難をも誇りとしています。苦難が忍耐を生み、忍耐が品格を、品格が希望を生むことを知っているからです。（ローマ 5:3-4）

これを私たちの告白としたいと思います。

【祈り】

時が良くても悪くても福音を宣べ伝えることを教えてくださっている、天の父なる神様。短い一生の中にも、私たちは様々な経験をいたします。安定期もあれば、激動の時代に直面することもあります。いずれにしても、この人生は一本の道であり、その道を信仰をもって走り抜くよう励ましを受けています。私たちにはどうにもならないことも多々ありますが、絶望するのではなく、主イエスが併走してくださっていることを感じながら、確信をもって歩を進めていきたいと願います。一人びとりの信仰を強め、立派に走り抜くことができるようお助けください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人生というマラソンを、信仰をもって走り抜かせ給う、父なる神の愛、
困難な道を行くときも、常に共に在し給う、主イエス・キリストの恵み、
主の臨在により、この魂を喜びで満たし給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。